
恋姫外伝～修羅と恋姫たち

南斗星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫外伝〜修羅と恋姫たち

【Nコード】

N5382Y

【作者名】

南斗星

【あらすじ】

陸奥の名を持つ男が恋姫の世界にやって来た。

この作品は『恋姫無双』と修羅の門外伝『修羅の刻』のクロスオーバー作品です。もし恋姫の世界に『陸奥圓明流』を使うものがいたならば…。という発想から生まれた作品です。チートとか転生物とかではありません。（圓明流自体チートのようなものですが）

一の刻 物語の始まりの出会い（前書き）

だいぶ遅くなっちゃったけど、もう1年以上たっちゃったけどw
修羅の門再開を祝して、書きました。

更新は遅くなるかも知れませんが、気長にやっていこうかと思いま
す。

では、本編どうぞ

一の刻 物語の始まりの出会い

伝説である

いつの時代も決して表に出ることなく

常に時代の影にいた

最強を誇る無手の武術があつた

その名を『陸奥圓明流』という……。

河東郡、とある村外

関羽こと愛紗は戸惑っていた。

自分が住む村の近くに盗賊らしき者達が見受けられるようになったとの話を聞いて、村で自警団を組織し見回りをしていたのだが、村の外れで怪しき男を発見したとの仲間の知らせにより駆けつけてみれば、確かに怪しき風体の男がいたのである。いたのであるが、その男は何をするでもなく唯一人近くの木に寄りかかるように寝てたのだ。

確かに不審な者ではあるが、愛紗はこの男は盗賊の仲間ではないだろうと当たりを付けていた。『盗賊の仲間ならば村を調べるような真似もせず、このようなところで寝転がっている道理がない』そう思ったものの怪しいのに変わりはないので、とりあえず起こして事情を聞こうと思った愛紗は持っていた武器《青龍偃月刀》の柄の部分で男の腹を軽く突いた。

「おい、おい、起きろ…ええい起きんか貴様」

短気なのか、一、二度小突いただけで起きそうにもないと判断した愛紗は、今度は強めに柄で叩いた。

愛紗は村で一番の強力である。村の男達が纏めてかかって行っても太刀打ち出来ないほどである。その愛紗が『強めに』叩いたのである。普通なら骨の一、二本折れても可笑しくはないのであるが、その男は気だるそうに振り向いただけであった。

「やっと起きたか、貴様このような所で何をやっている」

いきなり柄でぶっ飛ばしておいて、その言いようはないんじゃないかと周りの男たちは思ったが、決して口には出せないのである。

対して件の男の反応は

「寝てた」

そう言つとまた愛紗に背を向け寝だした。

「ふ、ふざけるなよ貴様!!」

からかわれたとも思ってたか、愛紗はそう怒鳴ると偃月刀を男の近くに叩き付けた。

偃月刀に叩かれた地面はものすごい音と共に陥没したが、男はさほど気にせず愛紗に向き直り

「問われたから答えたのに何をそんなに怒っているんだ？」

と不思議な者を見るような目で聞いてきた。

「このような場所でした眠こけてた訳があるまい。何の目的でここにいる、貴様まさか盗賊の一味か!？」

愛紗はさきほど自分で『盗賊ではない』と思ったことなどすっかり忘れ、そう問いただした。男の飄々とした態度に頭に血が昇り、冷静に判断などすでに出来なくなっていたのである。

そんな愛紗に対し

「腹が減ったが食うものがない、動くと余計腹が減るので仕方なく寝てた」

とまたしても飄々と男は答えた。

その男の態度に余計頭にきた愛紗がさらに男に詰め寄ろうとした所

ぐうつうつう〜

男の腹が盛大に鳴った

「……………」

一瞬辺りを静寂が襲った

愛紗は男を疑ったことが馬鹿馬鹿しくなり、はあ〜と溜息を付いた後武器を下ろした。

「もういい…疑って悪かったな。叩いてしまった詫びもある、村に
来い食事くらい馳走してやる」

そう言つて男を村に案内すると言つたあと、ふと思い出したように話しかけた。

「そつえば名を聞いてなかったな。私の名は関羽 字は雲長と言
う、貴様の名は？」

男は立ち上がり愛紗の後に続き歩き出しながら、名乗った

「陸奥」と

一の刻 物語の始まりの出会い（後書き）

1話1話は短めになるかも知れません

二の刻 陸奥 疾風

その男の名は『陸奥^{むつ} 疾風^{はやて}』と言った。

河東郡、とある村

「ハグハグハグ、ムグムグムグ ゴックン」

……愛紗は呆氣に取られていた。

腹が減って動けぬという若者を村に案内し、食事を振舞ったがこれがものすごい食いつぶりなのである。

最初は『余程腹が減っていたのであろう』と思って見ていたが、次第にそれは驚きに呆れにそして呆氣に変わって行ったのである。

陸奥と名乗った青年、歳の頃は17、8であろうか。決して大きな体ではなくむしろ小柄で愛紗より頭1つ分は小さい。

なのに大人が10人がかりで食べる量を、1人で食いしかもその勢いはいまだ止まらぬのである。

「ふう、食った食った、おばちゃんご馳走様〜」

そうこうしてる内にやっと満足したのか、青年は箸を置いた。

「やっと満足したか。ったく、この村もそんなに豊かではないというに…」

自分で言い出しといて何だが、施すんじゃなかったかと愛紗は今更ながら後悔していた。

「まあいい、おい陸奥とか言ったな。少し貴様に聞きたいことがあるのだがかまわんか？」

陸奥がかまわないと言ったので、愛紗は疑問をぶつけた。

「貴様、陸奥とか名乗ったが、それは姓が陸 名が奥か？ならば字はないのか？」

「うん？違う違う、姓は陸奥 名は疾風 と言う。ちなみに字はない」

それを聞いた愛紗は、ふむと頷いた後

「字がないとはまた珍しいな、貴様どこの出身だ？」

「この大陸の遙か東にある小さな島国だ。」

「東の方と言うと蓬萊の国か？」

「たぶんそれであってる」

「たぶん？」

愛紗は少し疑問に感じたが、陸奥がそれ以上は話す気がなさそうなので話題を変えた。

「それで貴様はどうしてあそこで行き倒れていた？行く宛でもあったのか？」

すると陸奥は首を傾けながら

「海辺で漁師が使う船で寝ていたら、何時の間にか海に出ていた。そこであんたらの国に流れ着いた。とりあえず腹が減ったので食いもんを探したけど見つからなかったたのであそこで寝てた」

まるで他人事のように答える陸奥を見て、愛紗は頭を抱えた。突拍子もない話だし、到底信じられることでもない。だが陸奥を見ていると嘘を言ってるとも思えない。結局愛紗はこのことは流すことにした。

「わかった、だがこれから先どうする？行く当てもないのだろう」

愛紗がそう問うと陸奥は笑って頷く

まったく笑い事ではないだろうに…

「なら村に置いてやるように皆に話を付けてやってもいい。」

ただしと喜ぶ陸奥を軽く睨みながら、愛紗は続ける。

「ただし自分の食い扶持の分は働いてもらうぞ。毎回あんな量をただ食いされてちゃ村人が飢え死にする」

陸奥がそれを了承したのを見て、愛紗は続ける

「今日は村長に頼んで寝床を用意してやる。明日になったら村はズレにある空き家を皆に手伝って貰って直すからそこに住めばいい。仕事に関してはその後考えよう」

そう言って食堂から出て行こうとしたがほと思い出たように聞いてみた。

「そつえば、お前武の腕前はとうだ？かなり出来るのか？」

それに対して陸奥は首を振りながら

「たいしたことはない」

と答えた。

愛紗もさほど期待してなかったようで

「そうか、わかった」

とだけ言った。

最近村の付近に賊が頻繁に出没するようになったので、万が一使い手ならと思って聞いてみたのである。

「まあいい今日はもう休め。明日はお前にも家の修理をやってもら
うぞ」

そういいながら部屋を出て行った。

三の刻 戦いの前兆

陸奥が村に住み着くようになってから、早一月が立とうとしていた。最初は陸奥を敬遠してた村人だが、かの者は人と交わるのが異様にうまかったのである。

3日も立たぬうちに子供達と親しげに遊ぶようになり、10日も立てばかなりの人と交流を持った。そして一月たった今では殆どの者がまるで昔からの知り合いのように接していた。

殆どの者と言ったのは例外が1名いるからである。誰であろう他でもない愛紗である。

愛紗は自分でも自覚するほど頑なな所があった。その為陸奥とはどうしても一線引いて接してしまうのである。

そんな愛紗とは逆に陸奥が村に住むようになった翌日には、もう陸奥に懐いた者がいた。名を張飛と言い愛紗とは幼馴染である。愛紗より年下な為、愛紗は張飛を妹のように可愛がっていた。また張飛も愛紗を姉のように慕いまるで本当の姉妹のようだった。

そんな張飛が陸奥を「お兄ちゃん」と慕うようになり陸奥に真名である「鈴々」を預けてしまったことに、一抹の不安を覚えた愛紗がなぜ陸奥を慕うのか聞いた所「面白いからなのだ」と笑顔で答えられ固まったのはつい最近であったような…。

ちなみに真名については陸奥が住み着くようになった日に、愛紗がそれとなく説明していた。外からやって来た陸奥はもしかしたら真

名についても知らぬのでは？と思ったからである。

頑ななところがあるが、基本的に世話焼きな愛紗であった。

こうして平和に村での生活を営んでいた愛紗たちであったが、その平和も長くは続かない物である。

昨今大陸のあちこちに黄布を名乗る賊が出没し、村々などを襲いその勢力を拡大していったのである。

愛紗たちの村の近辺でも賊の類が増えていったが、愛紗や鈴々などを中心とした若者たちによる自警団の活躍により、村を無事守っていた。

陸奥も自警団に参加するよう誘われたが

「争いは苦手だから」

と断られていた。

実際、愛紗は陸奥に争いことは向かないだろうと思っていた。

村の子供と遊ぶときでも、自分より何歳も年下の子供にチャンバラで負け、にこにこしてるような男なのである。

そんな争いごとに向かない男を無理やり戦わせるより、村で子供達と一緒にいてくれたほうがましと考えたのである。

それにいかに賊が出ようと、自分と鈴々がいれば大抵なんとかな

る自信もあつた。

実際いくつかの賊が攻めてきたときも、2人でほとんど片付けてしまったのであつた。

だが、その2人の強さが賊に思いもよらない行動を取らせる。

自分達だけでは敵わぬと知った賊達は、周りの賊と手を組み一大勢力を作り上げ一気に村に攻め入ろうと考えたのである。その数実に2千。

今村のそして愛紗達の運命は風雲急を告げていた。

四の刻 恐怖

「姉者、間違いないのだ。賊の大群はこの村を目指してるのだー！
」

妹分の鈴々が駆け込んでくるのを見て、愛紗は齒嚙みした。

（2千もの賊徒だと！なぜだ？なんでこんな小さな村にそんな大勢の賊が集まってくるのだ！）

自分達が近隣の賊にとっての脅威になるとは思いもよらない愛紗は、徒党を組んで攻めてくる賊の思惑がわからず困惑していた。

「とにかく村を守るには戦うしかない」

そうは言ってみたものの、それが難しいことは愛紗自身が一番わかってた。賊2千に対してこちらは戦える若者はせいぜい40人だ。あとは老人か女子供しかない。

一瞬逃げることも考えたが、もはやそれも不可能に近かった。

賊はもう近隣まで来ており、老人や子供をつれて逃げ切るのは難しかった。それにもし逃げ切れたとしても、この村を捨てては明日から生きるすべはなかった。

「老人や女子供は村の奥に隠れてろ、戦える人間は防戦の準備だ。」

今は泣き言を言っても始まらない、とにかくやれることはすべてやるしかあるまいと指示をだす愛紗。自警団を集めながら、ふと陸奥

が見えないことに気がついた。

「おい鈴々、陸奥のやつどうした？今こういう状況だ、あやつにも戦ってもらわなければ」

物の役に立つかわからないが、あやつでもいないよりはましと思い聞いてみたが

「知らないのだゝ気がついたら姿が見えないのだ」

と鈴々は首を振った。

あやつめ、まさか逃げおったか！と一瞬憤りかけた愛紗だったが、考えてみれば元々あやつは村の者ではない。あまりに自然に村に溶け込んでいたが、あやつが村に来てまだ一月足らずなのだ。我らと違いこの村で育ったわけでないあやつが、この村と命運を共にすることはない。元々あれほど戦いが似合わないやつもいないだろう。ならばせめてあやつだけでも無事に逃げてほしいと愛紗は思い直した。

村の入り口に簡易な防衛網をひき終えた頃合を見計らうように、賊らしき影が地鳴りと共に見えてきた。

まだ距離はあるものの、その殺気めいた姿に自警団の若者たちは明らかに脅えていた。

無理もあるまい、25倍もの賊が攻めてくるのだ、どうがんばった

って勝てる見込みなどない。

かと言って逃げ道ももはやない、あと数刻後には確実な死がまっているのだ、脅えるなど言う方が無茶だ。

かくゆう愛紗も自身の体が震えるのを感じていた。

自分だけなら絶望的な戦いだろうと戦い抜き死すら受け入れる覚悟がある。

だが、自分が負ければ親しき人々が死ぬのだ。

今の状況では正直守りきれぬ自信などない。

それが愛紗を恐怖せしめていた。

愛紗の葛藤など知る由もなく、賊達はどんどん近づいてきた。

見れば自警団の者達は恐怖のあまり、ガタガタと震え涙を流していた。

これでは数以前の問題で戦いにすらならない。

そう思った愛紗は覚悟を決める

「おい鈴々ここは頼んだぞ、私は撃って出る。お前は皆とここを守守するのだ」

2千人を1人で迎え撃とうと言うのだ、不可能に決まっている。

そう言つて自身を止めようとする鈴々を振りきり、愛紗は飛び出そうとしたが賊の前に1人の男が立ちふさがったのを見て、目を疑いつまつてしまった。

「あれは陸奥？あやつ何を…」

まさか1人で賊と戦おうとも言つのか？馬鹿な出来るはずがない。あやつは村の子供にすら勝てぬ弱者なのだぞ？自警団の仕事すら嫌がる弱虫なのだぞ？そんなあやつが賊に立ち向かえる筈がない。

愛紗は陸奥が自暴自棄にでもなつたか、一人で命乞いでもしに行つたかと思ひ助けに飛び出そうとしたが、その瞬間、賊ではなく陸奥から沸き起こる殺気のような物に押されまたもや二の足を踏んでいた。

（な、なんだこの気配は…死神とも言えいいのか？このような殺気は感じたことない。これを陸奥が放っているというのか…あやつといったい何者なんだ…）

愛紗は自身が言葉すら発せないことに恐怖しながら、陸奥から目が離せないでいた。

そして次の瞬間、村人たちはそこに修羅を観た。

五の刻 修羅

2千人の賊対たった1人の男

一方的な惨殺が始まった。

だが殺されていくのは男ではない、たった一人の男に2千もの賊がなすすべもなくやられていくのだ。

愛紗は自身の目を疑わずにはいられなかった。

賊達はもはやろくな反撃も出来ず、逃げ惑うだけであった。

陸奥は武器すら持たず、素手のままだった。腰に佩いた村に流れ着いた時から持っていた鉈くらいの大ささの剣すら抜いていなかった。

だというのに陸奥が腕を振る蹴りを出すたびに、賊が狩られていくのである。

武術と言うにはあまりに凄惨な殺人術、人を殺すだけに極められた技……

もはや賊に対する恐怖など吹き飛んでいたが、代わりに愛紗は陸奥が怖かった

陸奥からの殺気は直接こちらに向けられていたわけではない。だといつのに愛紗は死に抗えぬほど陸奥が怖いのである。まるで刃物を直接心臓に向けられてるような恐怖、瞬き一つで心臓を抉られるような感覚。

直接陸奥から殺気を向けられていない愛紗たちですらこうなのである。賊達の恐怖はいかほどか判ろうという物。

（アレは何なのだ？陸奥？違うアレが陸奥なわけない。陸奥は普段から飄々として弱虫で子供に好かれていて優しくて…あんな、あんな化物けものなわけない…ならアレはいつたいなんだと言うのだろう…）

愛紗は目の前で行なわれている光景に混乱しながらも、陸奥から目の離せぬ自身の感情に困惑していた。

あれほどいた賊ももはや賊の頭のみを残して、皆殺しにされていた。

賊の頭は陸奥に恐怖しながらも、もはや逃げられぬと悟ったか半ば自棄になって陸奥に相対し自身の武器である薙刀のようなものを叩きつける。

しかし陸奥は体を僅かにずらすだけでそれをかわすと、賊の腕の関節を極めて一本背負いのような格好で投げさらに賊の頭部に蹴りを放った。

「陸奥圓明流・雷」

陸奥が呟いたその技の名は愛紗に届いたのだろうか？

賊が全て片付いたと言うのに、誰も喜びの声を上げることはなかった。

皆が昨日まで慕っていた、この男が賊以上に怖かったのである。

賊の返り血を浴び、暁のような赤に染まった男に皆が恐怖の感情を送る。

その視線に陸奥は一瞬だけ悲しげな表情を浮かべた後、いつもの飄々とした顔に戻り村とは逆の方向に歩き出す。

それを見た愛紗は自身の固まっていた体を動かし、陸奥に駆け寄る。

「待てどこへ行くというのだ」

もはや村に陸奥を置けぬことを悟りながら、それでも愛紗はそう陸奥に問う

陸奥は少しだけ驚いた顔をした後、いつもと同じ飄々とした顔で愛紗に答える

「さあ？風の向くままにかな…俺は疾風だから」

そう言って歩き出す陸奥いや疾風に愛紗は叫ぶように名乗る

「待て、私の私の真名は愛紗だ、この名忘れるなよ」

それに振り向きもせず片手を挙げて疾風は答える

「愛紗か、いい名だ。お前さん別嬪だしその名忘れねえよ。俺の名は疾風だ、また会おう」

そついい残し疾風はその地を去る。

次に会うときはいつになるだろうか

愛紗はまた疾風には会える予感がしているのを感じていた。

六の刻 新たな出会い

疾風と愛紗達が分かれて二月ほど立った。

疾風が村を去ったのを知った鈴々や子供達は一晩中泣き腫らした物だが、大人達の大部分はほっとしていた。

あれほどの物を見せられたのだから仕方ないとはいえ、そんな大人達の態度に釈然としない物を感じながら引き止めることの出来なかった自分自身を見ると、情けない気持ちになる愛紗だった。

「疾風、あやつは今頃どうしているだろうか？」

また行き倒れてたりしないだろうか？と、どこか遠い空の下にいるであろう疾風を心配する愛紗であった。

所変わって、荊州長沙

「ぐ、ぐわー」「でやんす」「なんだな」

3人の黄布を巻いた賊らしき男が、一人の無手の男に叩きのめされていた。

「まだやる？」

男は特に凄むでもなく飄々とした感じで賊達に問いかけた。

「く、くそー覚えてやがれー!!」「あ、待ってくださいえ、兄貴ー」
「なんだなー」

と、小悪党丸出しの捨て台詞を吐いて逃げ出そうとする3人

「あ、忘れ物だよ」

そう言つてヒョイツと男達を取り落とした武器を投げてよこす

ガン「痛てー」ギン「おぶっ」ゴン「なんだな〜」

それぞれ投げられた武器を頭に受け、痛さにのた打ち回りながらそれでもなんとか逃げ出していく賊達

すると周りから「わあああー」と歓声が起こった。

「お兄ちゃん」

するとそんな歓声の中から1人の少女が飛び出し男に飛びついた。

どうやらこの5歳くらいの女の子を、あの賊達が攫おうとした所をこの男が助けたようである。

「大丈夫だったか」

と男が少女の顔を覗き込むように問うと

「うん!」と元気よく答える少女だった。

「そうか璃々ちゃんはお母さんと逸れちゃったのか」

男が璃々と名乗った少女の手を引きながら問うと、璃々は心細げな顔で頷いた。

「今日はお母さんがお仕事お休みだったから、街に連れてきてもらったの。でも人がいっぱい歩いていてお母さんの手、璃々と離れちゃったの」

うぐつと涙声になる璃々

そんな璃々を男はヒョイと自分の肩に乗せた、所謂肩車というやつである。

「よしならば、早くお母さんを探さないとな」

と男が飄々とした様子で笑いかけると、安心したのか璃々は

「うん！」

と笑顔を見せた。

璃々の母を2人で捜し始めて幾許か立った頃、辺りを見廻しながら近づいてくる胸の豊かな女性を見て、璃々が歓声をあげる

「お母さん」

「璃々!!」

男から飛び降りた璃々は、母親らしき女性に飛びつくように抱きついた。

「もう璃々あれほど逸れないように言ったのに、心配したのよ」

「ごめんなさい」お母さん

2人がお互いの無事を喜んでるの確認した男は、その場を離れようとしたが

「あの、娘が大変お世話になったようで、ありがとうございます」

と言う女性の声に引き止められていた。

「たいしたことはしてないよ」

と片手を振りその場を辞そうとした男だったが

「いえ、聞けば娘を連れてきてくださっただけでなく、娘が攫われそうになったのを助けていただいたとか、是非にお礼をさせて下さいな」

そう言つて男を引き止める女性の言葉に、男は少し悩んだ後

「じゃあ、メシ食わせてくんない？腹減っちゃった」

と飄々とした感じで言った。

それを聞いた女性は、一瞬呆けた表情を浮かべた後

「ふふ、わかりましたわ我が家でご馳走させていただきますわ」

と優雅に笑った。

「お兄ちゃんお家来るの？」と無邪気に喜ぶ璃々に優しく「そうよ
よかったわね」と言った後

「そう言えばまだお名前を伺っていませんでしたね？私はこの長沙
の太守韓玄の配下で名を黄忠 字を漢升と申します。改めて娘がお
世話になりましたこと、お礼申し上げますわ」

と丁寧に尋ねると、男は少し居心地が悪そうに

「俺の名は陸奥 疾風と言う、字は事情があって無い。そう畏まら
れるのは苦手だから普通に接してくれ」

と飄々とした態度で言った。

それを受けて黄忠は

「ふふ、判りましたわ。でもこの話し方は地なのでお許しください
ね」

と、世の男を虜にするような妖艶な笑みを浮かべた。

こうして新たな恋姫と縁を結ぶ陸奥。

果たしてこの先どのような波乱が巻き起こるのであるつか……。

七の刻 紫苑と桔梗（前書き）

今回は短めです

七の刻 紫苑と桔梗

黄忠の屋敷にと案内された疾風は、黄忠手ずからの料理で接待されていた。

その際「娘の恩人だから」と自らの真名である『紫苑』を預けると言ってきた。

真命に対してある程度理解していた疾風は「それほどのことをしたわけじゃない」と断ったのだが

「娘の安否がそれほどの事ではないと？」と笑顔で圧され否応なく受け取らされたのである。

「パクパク ウグウグ モグモグ」

あいからわずな食欲を見せる疾風に対して紫苑は「まあまあ」と笑顔を決やさず、璃々は「お兄ちゃんすごーい」と目を輝かせていた。

そんな中「おい紫苑居るのか？」

と来客があつたようである。

「あら、桔梗じゃない。どうしたの今日はいきなり尋ねてくるなんて？」

返事もない内に上がりこんできた来客に親しげに声をかける紫苑、

どうやら親しい間柄らしい。

「何、久しぶりに璃々に会いたくなってな、元気だったか璃々」

と頭を撫でる女性に「うん璃々は元気だよ」とにこにこ笑顔を見せる璃々。

そんな璃々にそうかそうかと笑顔を見せた後、ふと未だに食事を続ける疾風を見た。

「それで紫苑よ、さつきからこのわしを無視してメシを食らってる無礼者は何者じゃ？」

と少々不機嫌な顔で紫苑に問いただした。

「もう桔梗たらそんな言い方は失礼よ、こちらは璃々の恩人なのだから」

とそれまでの経緯を女性に説明する紫苑。

それを聞いた女性は

「ほうほう近頃の若いやつにしては、骨があるやつのようにやの、坊主。わしの名は厳顔、紫苑とは旧知の仲での、わしからも璃々を救ってくれたこと礼を言わせてもらおう。で、お主、名を聞かせてもらってよいかの？」

そう聞く厳顔にやっと満足した様子の疾風は

「陸奥 疾風」とだけ答えた。

「ところでお主、そうとう腕が立つと見たがどうじゃ？」

と紫苑と歓談していた敵顔が急に疾風に話を振って来た。

「あらゝ桔梗もそう思う？ 私も疾風様は只者ではないと思うわ」

と紫苑まで面白そうなことを見つけた風に食いついてきた。

疾風が「それほどでもない」と言っても

「それは謙遜じゃろゝわしの目は誤魔化せんぞ」とか「ですわねゝ私達では及びもつかない所に立っておいでとお見受けいたしますわ」とかいつて取り付く暇もないのである。

疾風の力量を看破するとは、さすが年の功といった所か「ギロツ」……すみません。

それはさておき、璃々まで「お兄ちゃんすごかったよゝ悪いお兄ちゃん達をこうエイ、ヤーって感じであつという間にやつつけちゃったのゝ」

と興奮して話すありさまである。

それを聞いてなにやら考えていた敵顔だが、急に「ふむ、決めた」と疾風に向かい

「お主に我が真名を預けよう」

と言い出した。

疾風が「何の脈絡もないだろ」

と断った所

「何を言う、お主は我が友の娘の窮地を救ってくれたではないか。それにわしはお主のことが気に入った、是が非でも受け取って貰うぞ」

と疾風の肩をバンバンと叩きながら笑って言う

「我が真名は『桔梗』紫苑共々よろしく頼むぞ」

そう言ってまた豪快に笑うのであった。

七の刻 紫苑と桔梗（後書き）

陸奥を翻弄するとは、恐るべし熟女コンビ
やはり年の功か

「「殺されたいの？」」

……すみません。もう言いません。

主人公設定（前書き）

今の所主人公以外オリキャラの出番の予定がないので、とりあえず主人公の設定を載せときます。

主人公設定

名前／陸奥 疾風：ムツ ハヤテ

性別／男

年齢／18歳

身長／153cm

体重／45kg

性格／いつも飄々としてつかみ所のない性格。
子供には好かれるし本人も子供好き。

備考／陸奥圓明流・現継承者

舞台設定／原作の「修羅の門」の設定に合わせると、『陸奥圓明流』は今から約千年前に誕生した武術となってますが、そうになると『真・恋姫』の世界に陸奥を持つてくるには『タイムスリップ』か『転生』もしくは『憑依』しかなくなる訳で、作者としては「転生によるチートキャラが圓明流の能力をもらう」という展開よりも「この時代にもし圓明流があつてその陸奥が恋姫の世界にきたら？」という話を書きたかったので、原作無視で「圓明流はこの時代よりもさらに何百年か前に誕生してた」という設定にさせていただきました。無理やり感バリバリですね。まあ二次小説ってことでご勘弁をw

あとこのSSで主人公以外のオリキャラ出すかやめるか迷ってます。

オリキャラ出すよりも、主人公と恋姫との絡みメインでやったほうがいいのだろうか？

意見ありましたらお願いします。

ちなみに一刀は出しずらいんですよ。

陸奥との絡みが想像できない…。

ので未定ってことでw

八の刻 常山の龍

疾風が紫苑達と出会ってから10日余り立っていたが、疾風は今だ長沙に留まっていた

璃々を助けた礼をされた後、疾風に特に行く当てがある訳でないと知った紫苑に、暫く当家に留まる様進められそれを受けて客分のよくな形で世話になっていたのである。

まあ正確には疾風と別れることを渋った璃々に泣き付かれた為という事情もあったが、あいからわず子供には少々弱いようであった。

そんな昼下がりに特にすることもなく暇を持余していた疾風は、仕事で出ている紫苑に代わり璃々の面倒を買って出ていた。

面倒を見るといふよりも、璃々と共に遊び歩くといった方が正確だが

その日も璃々と仲良く街中を出歩いていたのだが、疾風にとってこの街は中々興味を引かれるようだった。この大陸に流れ着いてからという物これほど大きな街に来たのは初めてのことだった。

無論中央と比較するまでもないのだが、それでも疾風にとっては目新しい発見があり何かを見つけては璃々に嬉々として聞いて回るのだった。

そんな疾風に璃々が楽しそうに説明していく。その様はまるで仲の良い兄弟のようだった。

ただし兄と妹の立場が逆だった

しばらく街中を散策してた2人だが、小腹が空いたと疾風が璃々を茶店にと誘った。

程なくして仲良く茶店に腰掛けた2人だったが、一瞬疾風が面白い物でも見かけたような視線を店の奥へと送った。その視線の先には3人の女性客らしき者たちがいるだけだったが

「む、」

一方視線の先では3人の女性がこの店の自慢の胡麻団子をいただいていたが、そのうちの1人白い浴衣のような物を着た武人らしき女性になにやら声を漏らしていた。

「どうしたのですか星ちゃん？」

そんな女性を不審に思ったか、隣に座った金髪で頭に奇妙なオブジェを乗せた小柄な女の子が声をかける

「いや何、一瞬強い視線のようなものを感じたのだけ？」

気のせいだったかと茶を啜る女性に、先程の女の子が冷やかし混じりに言う

「おやおや星ちゃんも隅に置けませんね。どこぞの男性に懸想でもされましたか」

それだったら女として満更でもないのだがなと返し、胡麻団子を口に放り込む

「とすると武人としての感というやつですか？」

と2人の対極に座った眼鏡をかけた冷静そうな女性が問いかける

「ふむ、まあそうだが私の気のせいだったかも知れん、さほど気にすることもあるまい」

ともう一度茶を啜りながら星は殊更気にしてないと答える。

「さてそろそろ出るとしようか」

団子を食べ終わり茶の最後の一口を飲んでから星は2人に告げた

2人も頷き席を立とうとした時、店先でなにやら騒動が起きたようだった。

「お客様、後生ですからご無体はお止めくださりませ！？」

「うるせい引つ込んでる爺、この俺様にこんな不味いもん食わせやがって」

「やめてお爺ちゃんに乱暴しないで」

「やかましいぞこの小娘^{ガキ}、兄貴に逆らうのか!」

騒ぎの方を見れば、店主らしき老人を5人もの男達が囲んで狼藉を働こうとしてるようだ

「まったく何処にでもこういう馬鹿どもがいるもんだな」

せつかくうまい茶と団子で至福の時間とすごしたというに、これでは台無しではないか

「てめえ、この落とし前はどうつけるつもりなんだ? ああん」

「兄貴、この小娘に責任をとって貰いましょうや」

下卑た笑みを浮かべ、嫌がる娘を引き寄せる男

「いやあ、放して、お、お爺ちゃん!」

「うるせい!! 静かにしろ」

パァン

「止めてください!!? 孫娘にだけは手を出さねえてください」

嫌がる娘に手を挙げる男

「もはや黙って見ておれぬな」

怒りを露にしながら、自分の武器であろう槍を手にする星。

「星ちゃん殺しちゃ駄目ですよ」

とオブジエを乗せた女の子が事も無げに言う

相手は大の大人が5人もいるというに、止めるどころか相手の心配をする始末だ

見れば眼鏡の娘も心配など無用とばかりに見守っている。

「判っている半殺しにしてくさ」

と、にやりと口元を歪め星は一步踏み出そうとしたが、それより早く客の連れらしい小さな女の子が男達の前に立ちふさがった。

「おじちゃんたち悪いことしたら、めっだよ!!」

星は勇気ある子供だと歓心しかけたが、男の1人が腰の刀に手をあてるのを見て「まずい」と思い駆けつけようとした。

「引っ込んでる糞餓鬼!!」

と振り下ろされた刀を止めたのは、星の槍ではなく女の子の連れらしい男の手だった。

「て、手前ゝ何しやがる放しやがれ!？」

疾風に手を掴まれた小悪党は、威勢よく反対の手で男に殴りかかったが掴まれた手を疾風が軽く捻ると体が一瞬にして宙に浮き、次の瞬間地面に叩きつけられていた。

「野郎なにしやがる!！」

疾風に仲間をやられた男たちは怒気をあらわにし、武器を抜き次々襲い掛かって行った。

だが、怒り任せに振るわれた武器が疾風に掠ることもなく、全員が軽くのされていく。

最後の1人が打ちのめされたあと、疾風は店主のところに近づき

「大丈夫かおっちゃん」

と声をかけた

「ええ、大丈夫でございます。あぶないところをお助けいただいて…
「野郎!！」…ひい」

と店主のお礼を遮って小悪党の1人が立ち上がり再び襲い掛かってくる。

だが疾風は振り向きもせず男の武器を掴むと、男の顔を覗き込み

「金払って失せな」

とだけ短く言った。

その短い言葉に男たちは威圧されたかのように、我先にと金を置いて逃げ出していく

その金を拾って店主に渡したあと、自分の懐からも代金を払って璃々の手を引き出て行く疾風

すると1人の女性が疾風たちに近づいてきた。

「見事な腕前ですな、貴殿宜しければお名前を伺えませんか？」

疾風が振り返るとそこには、白銀に輝く槍を持ち口元に挑発的な笑みを浮かべた女性がこちらを興味深げに眺めていた。

「申し遅れましたが、拙者は姓を趙、名を雲、字を子龍と申す。」

とその女性は名乗った。

八の刻 常山の龍（後書き）

予告 次回は疾風VSメンマさん

…の予定だけど、予告は予定、予定は未定…

九の刻 武人の性

趙雲 子龍と名乗った女性は疾風に近づくと、興味深げな表情で話しかけてきた。

「陸奥 疾風殿と申されましたか、失礼ながら先程の腕前といい貴殿は只者ではないと見ましたが、ひとつ拙者の願いを聞いてくれませんか？」

そういいながら、楽しそうに顔を近づけてくる。

後ろの連れの二人を見ると、また始まったかと言つような表情をしていた。

「うん何？」

そんな趙雲に疾風は事も無げに、問いかけた。
疾風と手を繋いでる璃々は遊びつかれたか少々眠そうだ。

趙雲は背筋を伸ばすと真面目な声で

「拙者と立ち合つていただきたい」

と持っていた槍を疾風に向けながら、そう誘^{いざな}つてきた。

「ずいぶんいきなりだな」

と疾風が苦笑していると、趙雲の連れの1人であろう頭にオブジェを乗せた少女、確か程立と言ったか、が近づいてきて

「そうですよ星ちゃん、それではなんの脈絡もなく喧嘩を売ってる
とは思えないのです」

と言ってきた。

そして疾風の方に向き直ると

「すみませんね、星ちゃんがいきなり失礼なことを言いまして」

そう言って疾風に頭を下げてくる。

「ですがお兄さん、星ちゃんがこうなったらもう誰にも止められま
せんので、犬に噛まれたたとも思っただけで諦めて付き合ってくださいま
せんか？」

「風、それでは私は嫉妬のなっていない野良犬みたいではないか？」

「……」

「……」

「……ぐう」

「寝るな！」

いきなり眠った程立にもう1人の連れ眼鏡をかけたを女性、こちら
は戯志才と名乗ったか、が突っ込みを入れる。

「おおう、あいからわず凧ちゃんの突っ込みは的確なのです。」

と、緊迫しかけた雰囲気は一瞬にして碎け散った。

「それで何で俺と戦いたいんだ？」

乾いた空気を入れ替えるごとく、改めて疾風が趙雲に問いかけた。

「それは貴殿が強いからだ。」

それに対しての趙雲の答えは至極単純なものだった。

「貴殿も武人なら判るだろう？己よりも強いかも知れぬ者と戦いたいと思うのは、武人の性さがと言うもの」

そう言つて、にやりと笑いながらあなたもそうでは？と視線で問いかけてくる趙雲

そんな趙雲の挑発とも取れる態度にも、飄々たる態度を崩さない疾風

「それでどうですか、拙者の願い聞き入れてはもらえませんか？
ようか？」

挑発は無駄だと思つたか、一転して真面目な眼差しを向けながら疾風に頼み込む趙雲

そんな趙雲に対して疾風は

「かまわないよ」

とあくまで飄々と軽い感じで受けた。

「いいのですか？そんなに簡単に受けてしまつて」

疾風が簡単に勝負を受けてしまつたことに、疑問を感じたか、戯志才と名乗つた少女がそう問いかけてきた。

疾風は眠つてしまつた璃々を背負いながら、「いいよ」とあくまで飄々と答える。

そんな疾風を見ながら趙雲は興奮気味に

「凜よ、陸奥殿がいいと言つてるのだからかわるではないか、では陸奥殿さつそくお手合わせ願おうか！」

と持つていた槍を構える

「ちょ、ちよつと星、あなたこんな街中でいきなり決闘を始める気ですか！？」

そんな趙雲を見て、慌てて止めに入る戯志才

「む、それもそうか」

と自身が先走つたことを恥じたか、顔を赤らめながら構えていた槍を下ろす趙雲

「それにその背負つた娘さんまで巻き込むつもりですか？」

と言いながらトコトコと疾風に再び近づいた程立が

「すみませんねお兄さん、星ちゃんはどうなると周りが見えなくなる猪さんですから、悪気はないんで許してくださいね」

と再び疾風に向かって頭を下げた

「…風よ、誰が猪だと？」

「……」

「……」

「ぐう」

「だから寝るな！」

都合が悪くなった程立が再び眠ると、戯志才が再び突っ込む

そんな様子を疾風は楽しそうに見ていた。

「それでは明日改めて立ち合わせていただくと言ったことでよろしいかな？」

結局今日は璃々を連れて帰らないといけない為、明日にしてほしいとの疾風の要望により明日改めてということになった。

趙雲は納得しがたい様子だったが、2人に諫められて明日と言うことで引き下がったようだった。

「では明日、日の出の頃城門前でお待ちしてますぞ」

「ああ」

さすがに街中で戦うわけにも行かず、郊外という戯志才の提案で城門で待ち合わせと相成った。

「それでは御免」

と意気揚々と引き上げていく趙雲、申し訳なさそうに頭を下げる戯志才、ぼくとした表情で2人についていく程立達を見ながらどこか楽しげに笑った疾風は璃々を背負いながら帰途についたのであった。

九の刻 武人の性（後書き）

おや？戦闘シーンまでいかなかった

次回こそかならず！

十の刻 武の極み（前書き）

感想の返事遅れ気味で申し訳ありません。
なるべく早く遅れるようにします。

十の刻 武の極み

茶店での一件の翌日、疾風と趙雲、程立、戯志才の4人は、街から少々離れた場所に来ていた。ここなら邪魔が入らないからと存分に戦おうと、趙雲が早速やる気を見せる。

「ではさっそくお手合わせ願おうか」

と自らの分身である白銀の槍を疾風に向ける趙雲

対する疾風は腰にある刀に手をかけたかと思いきや、その刀を鞘ごと投げ捨てる

「…どういっつもりです、武器を捨てるとは私を舐めてますかな？」

自らの武を侮られたかと、怒りを露にする趙雲。

そんな趙雲にいつもと変わらぬ風に

「俺の流派は無手なんだ、気にせずこい」

と、飄々と答える疾風。

「…拙者と素手でやろうとは、後悔されるな」

そんな疾風の態度を挑発と取ったか、怒気を収めぬまま槍を持つ手に力を込める趙雲。

そして疾風がわずかに構えた瞬間、趙雲は槍をもの凄く速さで繰り

出してきた。

ビシュ

その突きの速さは、この大陸でも五指には入ろうかと言つもの

だが、なんと疾風はその槍を素手で掴み取っていた。

「！？なんと拙者の槍を素手で掴むとは」

趙雲が驚きの余り固まっていると

「殺す気でない攻撃など俺にかすりもしないよ。本気で来なよ、じやないと退屈だよ趙子龍！」

ブンと槍先を放りながら、趙雲に向かって気を開放する

ゾクッ

その瞬間、趙雲はもとより少し離れた場所で見守っていた、程立と戯志才の2人まで呼吸が出来ないほどの重圧を感じる。

（な、なんだこの気は…こんな呼吸が止まりそうなほどの重圧今まで感じたことがない…こ、こんな気を人が出せるというのか！）

趙雲は背中に嫌な汗が流れるのを感じながら、それでも口元がにやけるのを止めなかった。

（私はこの男の前に立つてることが恐ろしくなる、震えが止まらず今すぐ逃げ出したくなるほどに……だがしかし同時にこの男と戦え

ることに愉悦を感じ歡喜に打ち震える自分もいる)

趙雲は恐怖と歡喜に魂が震えるのを感じながら、改めて槍を構える
「先ほどは失礼仕った、どうやら侮っていたのは拙者の方でござったな」

と軽く頭を下げた後、槍先に殺気を込め再び疾風と向かい合う。

「では私も慢心は捨て本気で参りますぞ!!」

そう言つて疾風に向かって駆け出す趙雲

疾風が構える中、趙雲の無数の突きが襲い掛かる

「いくぞ、この趙子龍の本気の突き、見事受けてみよ、ハイ、ハイ、ハイー!!」

先程放った突きとは明らかに違い、氣迫のこもった槍先が何十と疾風を襲う

だがそれでも陸奥には届かない。さすがに槍を掴むような真似は出来ないようだが、それでも全てかわしきられてしまう。

「どうした陸奥殿、あれほどの大口を叩いた割には避けるのが精一杯ですかなー!!」

自分が本気で放った何十、何百という突きをこれほどまでに見事にかわしきる陸奥に恐怖と賞賛を感じながら、あえて挑発するように口元を歪める趙雲

それに対し疾風も口元に笑みを浮かべながら

「ならいく！」

と言い放つと無数の突きが交差する中、あえて前に出る

それまで見事に趙雲が放つ槍をかわし続けていた疾風だが、前に出ることと間合いが詰まり体を槍先が掠すめるようになる。

それでも引かず前に出る疾風、趙雲はさらに限界を超えた速度で突きを放とうとしたが、疾風の間合いに自身が入り込んだ瞬間、己の『死』を本能的に感じ瞬間後ろへと跳んだ。

ガシィー！！

趙雲が跳んだ瞬間、疾風の蹴りが趙雲の顔面を襲った。瞬間的に腕を上げ防御したがそれでも体ごと浮かされた。

「ぐ、ぐむっ」

（なんとという蹴りの威力、あの瞬間後ろに跳べなければ死んでいたな）

趙雲は己が感じた恐怖に全身が総毛立つの感じながらも再び槍を構えようとした、とその瞬間疾風が追撃をかけるごとく趙雲の懐に入る。

「む」

趙雲が反応し構えると同時に疾風の回し蹴りが趙雲の胸に向かって放たれた。

「くっ！」

それになんとか反応し背を向けた疾風を串刺しにしようかと槍を放とうとする趙雲

ゾクッ！？

が、その瞬間危険信号が趙雲の中に駆け抜け、またしても後ろへ跳ぶ

ぶわっ

すると疾風の体が独楽の様に回転し、趙雲の顔面めがけ先程と逆の足で後ろ回し蹴りを放ってくる

「ちい！」

その蹴りを紙一重でかわし、再び間合いをあげ槍を構えなおす趙雲

「最初の蹴りをかわしても体が空中で回転し再び蹴りが襲ってきた、あのような蹴り技があるとは…」

と趙雲が感嘆すれば

「旋^{つむじ}を初見でかわす者がいるとは」

と疾風も賞賛の声をあげる。

再び疾風に槍先を向けながら趙雲は、このままでは勝ち目がない事を悟っていた。

（このまま突きを数多く放つても、陸奥殿には届かんだろう…ならば残った全ての力を一撃に込め、最後の突きにすべてを賭けるのみ！！）

覚悟を決めた趙雲は、全身の力を抜きただ最高の突きを放つべく刃先に集中していく

それを感じ取ったか、疾風の気も高まっていく

両者の間に高まる緊張、もはや程立と戯志才も声を出すことすら出来ない

（思えば初めて槍を持ったあの日からの修練は、この瞬間の為にあったのかもしれない）

趙雲の中に今まで放った無数の突きが交差する

「ではまいるぞ陸奥殿、この突きこそ趙子龍が今放てる最高の突きでござる！！」

そう言い放つと趙雲は疾風に向かって駆け出す

「ハイー！！」

気迫の籠った掛け声と共に、趙子龍の最高の突きが疾風を貫いた、と次の瞬間疾風の体が霞み消え去った

（残像だと！あの突きをかわしたというか！！）

驚愕と共に振り向いた趙雲の目に映ったのは、己を襲う疾風の蹴りだった

ガシイイー！！

（ああ、届かなかったでござるか…）

頭を蹴り抜かれながら、趙雲を襲った感情は悔しさでも悲しさでもなく、ただ遥かな高みにあるであろう武への憧れであった。

どさ…。

「「星ちゃん（殿）！？」

疾風の蹴りを受け大地に横たわる趙雲を見て、硬直の解けた程立と戯志才が駆け寄ってくる。

「…生きてるよ」

そんな二人に無事だと声を出す趙雲

「「ほ〜」」

その声を聞き、安心したかその場にへたり込む二人

そんな二人の様子にくすりと声を漏らした後

「…あのような動きを人が出来るとは、武の極みとは遙かに遠いですな……。」

と誰に問うでもなく漏らした後、いつか自分もあの高さまで上り詰めるのだろうか？と、今はまだ手の届かぬ空に手を伸ばすのであった。

十の刻 武の極み（後書き）

戦闘描写って難しいですね
これが作者の限界でした。

感想などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382y/>

恋姫外伝～修羅と恋姫たち

2011年11月23日15時47分発行